

「枕草子」古語・現代語訳と解説 (期末テスト対策ポイントまとめ)

「枕草子」原文と清少納言について

「枕草子」原文

枕草子(まくらのそうし)

【原文】

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏(からす)の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁(かり)などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。



清少納言とは

枕草子の作者は、平安時代の清少納言。

清少納言は、「一条天皇の中宮定子（ちゅうぐうていし）の女房」なんだけれど、これってどういう意味かわかるかな？。

「一条天皇の中宮定子の女房」とは

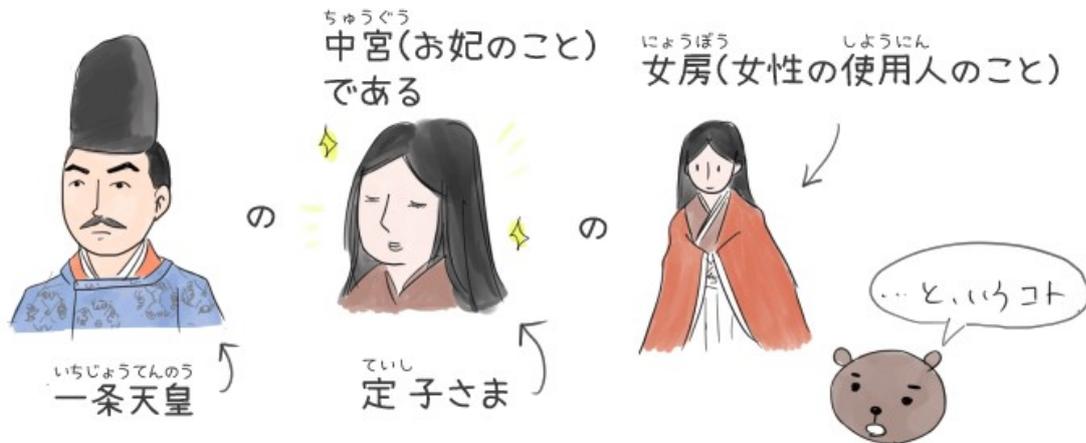
「一条天皇」とは、平安時代の第66代天皇のことだね。

「中宮」というのは、天皇のお妃（きさき）さまのこと。

「定子」というのは、そのお妃様の名前なんだ。

つまり、「一条天皇の中宮定子」とは、「一条天皇のお妃さまの定子さま」ということ。

「女房」というのは、平安時代に位の高い人のお邸（やしき）で働いていた女性のお手伝いさんのこと。



天皇のお妃さまに女房として仕えることができるのは、超エリートだけ。

清少納言はとても美しくて教養がある女性だったという証拠だね。

「枕草子」とは

「枕草子」は、清少納言が書いた「随筆」。

随筆とは、見聞きしたことや思ったことを、気ままに自由な形式で書いた文章や作品のことだよ。



枕草子は、清少納言が中宮定子のところで働いていた時の宮中（天皇が住む邸のこと）での生活の様子や、出来事、思ったことなどを書きつづったものなんだ。
なぜ「枕草子」というタイトルなのかというと、中宮定子と清少納言のやりとりがきっかけになっているよ。

なぜ「枕草子」というの？

あるとき、定子さまが「何も書かれていない冊子」をプレゼントされたんだ。

今で言う「ノート」のイメージ。

「紙」は、当時ではとても貴重なもの。

定子さまが「何を書いたらいいかしら？」というと、清少納言は「枕でしょう。」と答えたんだよ。

この「枕」はどういう意味かは色々説があるけれど、「枕もとにおいて、毎日のことを書く日記にする」とか、有名な漢詩にひっかけたダジャレだったのでは？などと言われてるよ。

この「枕」という清少納言の返しが気に入った定子さまは、その冊子を清少納言にあげちゃったんだ。

それで清少納言がその冊子に書いたのが「枕草子」というわけ。美しくて教養がある女性だったという証拠だね。

くまごろう「「草子」というのは「冊子」のことをあらわす言葉だよ。「枕」＋「草子」で、「枕草子」というタイトルのできあがりだね。」



「枕草子」テスト対策歴史的仮名遣いについて

「歴史的仮名遣い」とは

歴史的仮名遣いは、今の日本で普通に使われている「現代仮名遣い」に比べて「古い」仮名遣いのことだよ。

「枕草子」は平安時代の作品だから、ところどころに歴史的仮名遣いが使われているんだよ。

テストでは、歴史的仮名遣いが使われている部分を「現代仮名遣いに直しなさい」という問題が出たりするので、よくチェックしておこう。

赤字が歴史的仮名遣いが使われているところだよ。

枕草子

春はあけぼの。やうやう(ようよう)白くなりゆく山ぎは(わ)、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ(お)、蛍の多く飛びちがひ(い)たる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもを(お)かし。雨など降るもを(お)かし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端(は)いと近(ちか(こ))うなりたるに、烏(からす)の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへ(え)あは(わ)れなり。まいて雁(かり)などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとを(お)かし。日入り果てて、風の音、虫の音(ね)など、はた言ふ(う)べきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふ(う)べきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶(ひおけ)の火も白き灰がちになりてわろし。

※「ちかう」は、歴史的仮名遣いの「かう」が現代では「こう」になるよ。



「枕草子」テスト対策古語の意味について

枕草子は平安時代の作品なので、現代では使わないような言葉や、現代だと意味が違う言葉が使われているよ。

くまごろう「そのような言葉を「古語」というよ。」

テストでは、古語の意味を答える問題が出たりするので、ひとつひとつ確認しておこう！

「枕草子」に登場する古語と意味

あけぼの	明け方のこと。
やうやう(ようよう)	だんだんと
山ぎは(わ)	空側から見た「山と空が接しているように見える辺り」のこと。 ※山の端は、おなじ辺りを山側から見た言葉。
紫だちたる	紫は、今の紫よりも少し赤みがかかった紫色のことで、「紫だちたる」は、「紫がかかった」という意味。
たなびきたる	「たなびいた」という意味。雲などが横に長くかかること。
さらなり	「言うまでもないが」という意味。
なほ	やはり
飛びちがひ(い)たる	「飛び交っている」という意味。
をかし	味わい深い、趣(おもむき)があるという意味。
山の端(は)	山側から見た「山と空が接しているように見える辺り」のこと。 ※山ぎはは、おなじ辺りを空側から見た言葉。
近うなりたる	「近づいた」という意味
寝どころ	枕草子のこのシーンでは、からすの寝ぐら(鳥が寝るところ)のこと。
あは(わ)れ	しみじみしたものを感じさせるという意味
まいて	まして
つらねたる	列を作って連なった状態のこと
いと	「とても」、「たいそう」という意味
日入り果てて	日が完全に沈んでしまつて
はた言ふべきにあらず	これまたいまさら言うまでもない(わざわざ言わなくても十分なほど当たり前だ)という意味。



	「はた」は、「さらにまた」という意味。
つとめて	早朝のこと。
またさらでも	また、そうでなくても。「さらでも」は「そうでなくても」という意味。
炭もて	炭を持って
渡るも	枕草子のこのシーンでは、廊下を渡っていくということ。
つきづきし	しっくりしている、調和がとれている。
ぬるく	「ぬるく」とは、現代のように「ぬるい（生暖かい）」ということ。
ゆるびもていけば	「ゆるぶ」は「ゆるむ」という意味。 「もていく」は、「だんだんと〇〇になる」という意味。 なので、「だんだんとゆるんでいく」ということ。
火桶	木製の丸い火鉢のこと。
灰がち	灰「ばかり」という意味。
わろし	良くない、好ましくない。という意味。



「枕草子」テスト対策現代語訳と内容

教科書で学ぶ枕草子の「第一段」には、四季の良いところや趣があると清少納言が感じたことが思いのままに書きつづられているよ。

テストでは、枕草子に書かれている内容（どんな事を、清少納言は良いと言っていたかなど）について問題に出されたりするので、よく理解しておこう。

枕草子（現代語訳）

春は、明け方（が良い）。

空の山ぎわの辺りが、だんだんと白んできて、少し明るくなってきて、紫がかった雲が横に長くかかっている（のが良い）。

夏は、夜（が良い）。

月が出ている時はもちろんだが、闇（月が出ていない時）でも、蛍がたくさん飛び交っている（ので良い）。

また、（たくさんでなくても）ほんの1匹か2匹がほのかに光って飛んでいくのも味わい深い。

雨などが降っても趣がある。

秋は、夕暮れ（が良い）。

夕日が差して、山の空との境目の辺りに（夕日が）とても近づく頃、からすが寝ぐらに
いこうと、3~4羽、2~3羽などになって飛び急ぐことさえもしみじみとした思いだ。

ましてや、雁などが列を作って連なって、とても小さく見えるのはとても味わい深い。

日が完全に沈んでしまって、風の音、虫の音など（が聞こえるのは）、これまた言うまでもなく（趣がある）。

冬は、早朝（が良い）。

雪が降ったときは言うまでもない。霜がとても白かったり、またそうでなくても、とても寒い時に火などを急いでおこして、炭を持って廊下を通るのもとても（風情に）合っている。

昼になって、（寒さが）だんだんとゆるんで生暖かくなっていくと、火桶の火が白い灰ばっかりになってしまって良くない。



省略の表現について

「枕草子」では、述語が省略されている部分があるよ。

【述語の省略ポイント】

- ・「春はあけぼの。」
→「春はあけぼの(がをかし)。」
- ・「夏は夜。」
→「夏は夜(がをかし)。」
- ・「秋は夕暮れ。」
→「秋は夕暮れ(がをかし)。」

どれも「がをかし」が省略されているよ!

- ・「紫だちたる雲のほそくたなびきたる。」
→「紫だちたる雲のほそくたなびきたる(のがをかし)。」
- ・「闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。」
→「闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる(のがをかし)。」

どちらも「のがをかし」が省略されているよ!

「枕草子」テスト対策まとめ

「枕草子」まとめ

- 枕草子は清少納言によって書かれた随筆。
- 清少納言は、平安時代に一条天皇の中宮定子に仕えた女房。
- 枕草子の第一段には、四季の良いところなどについて、清少納言が感じたことが思いのままに書かれている。
- ポイント①歴史的仮名遣いが使われているところを確認しよう
- ポイント②使われている言葉の意味を確認しよう
- ポイント③書かれている内容について確認しよう

